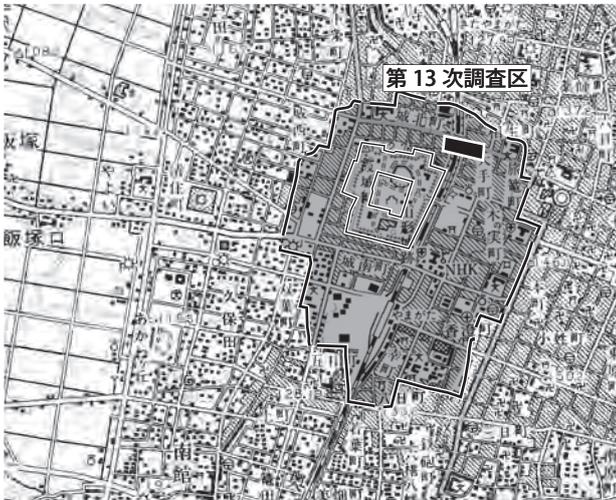


やまがたじょうさんのまるあと
山形城三の丸跡 (第 13 次)

遺跡番号	201-003
調査次数	第13次
所在地	山形県山形市城北町一丁目・大手町
北緯・東経	38度15分31秒・140度19分59秒
調査委託者	国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所
起因事業	一般国道112号霞城改良事業(城北町・大手町)
調査面積	2,700㎡
受託期間	平成25年4月1日～平成26年3月31日
現地調査	平成25年5月20日～10月31日
調査担当者	小林圭一(現場責任者)・川崎康永・東海林弘和・市川光紀
調査協力	山形市上下水道部・山形市教育委員会・山形県教育庁村山教育事務所
遺跡種別	集落跡・城館跡
時代	奈良時代・平安時代・中世・近世
遺構	竪穴住居跡・溝跡・土坑・柱穴・井戸跡・河川跡
遺物	縄文土器・土師器・須恵器・陶磁器・金属器・瓦・銭貨(文化財認定箱数:36箱)



遺跡位置図(1:50,000)

調査の概要

山形城三の丸跡は、霞城公園のある山形城(本丸・二の丸)を取り囲む東西約1.6km、南北約2kmの広大な城館跡で、文禄・慶長年間(1592～1615年)に最上氏第11代当主の最上義光が、三重の堀を構えた城郭として整備したと言われており、国内では5番目の広さで、奥羽地方では最大の城であった。しかし最上氏は元和8年(1622年)に第13代義俊が改易され、それ以降鳥居氏から水野氏まで藩主が転封・入部を繰り返し、石高も57万石から5万石まで削減された。その結果、次第

に広大な山形城を維持することが困難となり、手入れが行き届かず、幕末期の水野氏5万石時代には三の丸のほとんどが水田や畑になっていたと言われている。

今回の発掘調査は、国道112号の拡幅工事に起因するもので、一昨年の第9次調査、昨年の第11次調査に続いて実施された。昭和橋の西側の城北町がF区、東側の手町がG区とH区の三つの調査区に区分して、F区、G区、H区の順序で実施した。

遺構と遺物

昭和橋西側のF区では、石組みの井戸跡が2基検出された。そのうちの1基は石組みの直径が約1m、深さは地表面から2m以上に達するもので、周辺から出土した陶磁器類から、近世に作られ使用されたと判断される。

昭和橋東側のG区では、奈良・平安時代の竪穴住居跡が6棟、近世の井戸跡が2基、その他に近世～近代にかけての土坑や溝跡が検出された。竪穴住居跡は一辺が4～6mの方形で、深さが10～30cm程度と浅く、主軸は4方位を向いており、いずれも出土土器から8～9世紀代の住居跡と考えられる。近世の土坑では、捨てられた瓦がまとまって出土した土坑が2基検出された。瓦の文様から17世紀中頃～後半にかけての瓦とみられ、建

物の改修などで廃棄されたと考えられる。

遺物としては、古墳時代の土師器や奈良・平安時代の土師器・須恵器、近世の陶磁器類が出土している。中には16世紀末～17世紀初め頃に九州の唐津で作られた陶器など、最上氏の時代に関係した遺物も含まれている。

まとめ

今回の調査では、奈良・平安時代～近世・近代まで各時代の遺構・遺物が検出された。特に古代の住居跡が6

棟検出され、生活の重要な場所になっていたことが確認できた。江戸時代には武家屋敷となっていた一帯は、古代から既にある程度の規模の集落が存在しており、そうした集落を基盤に城下町が形成され、それが近代の山形市街地へとつながったと考えられる。現在の県都である山形市の中心地には、古代から連綿と続く人々の生活の跡が残っていた。

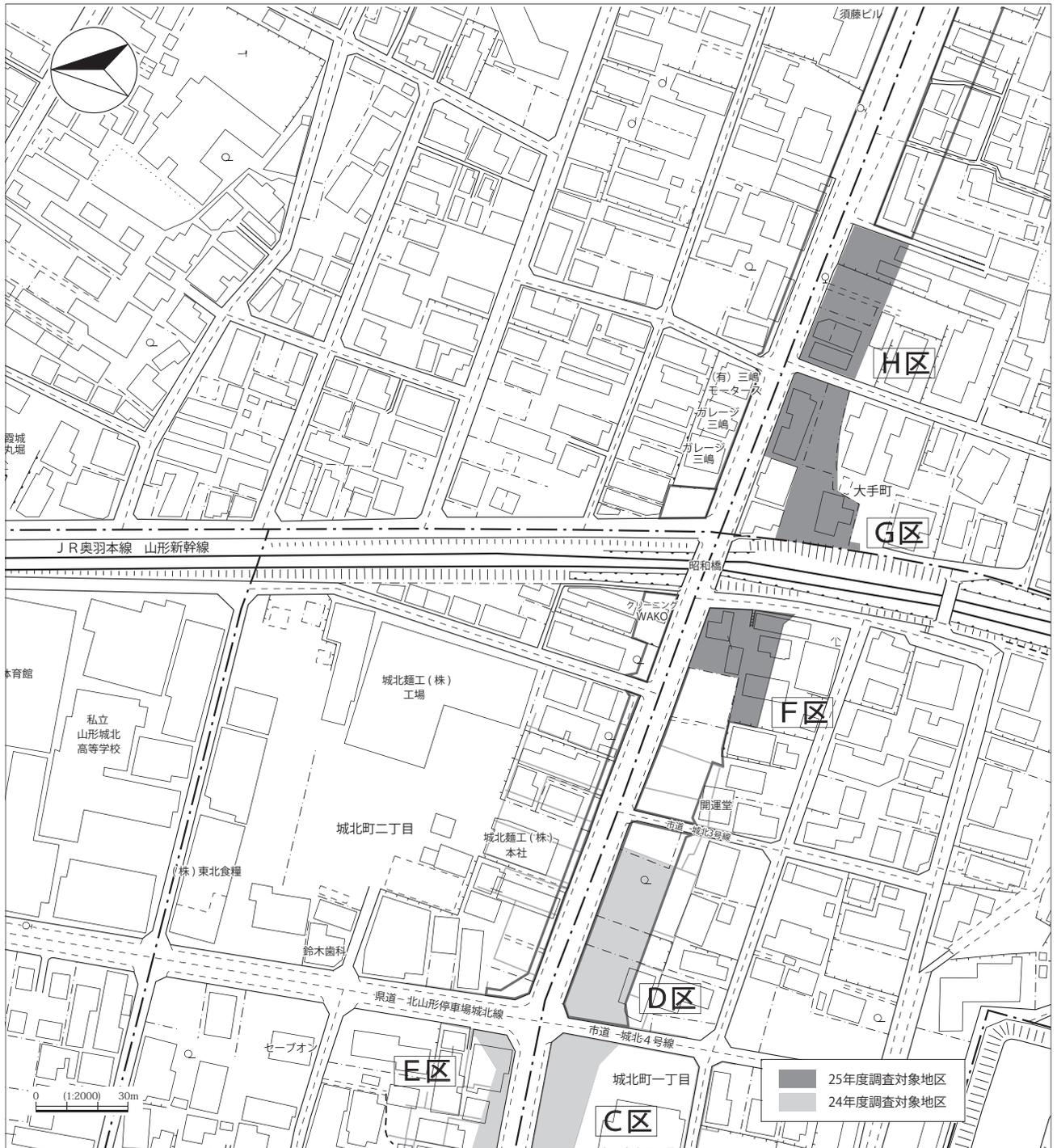


図1 調査区概要図



写真1 F区全景 (北東から)



写真2 F区 SE1156 井戸跡



写真3 G区 ST1209 竪穴住居跡



写真4 G区 SE1198 井戸跡



写真5 G-2区全景 (南東から)



写真6 G区 ST1343 カマド遺物出土状況

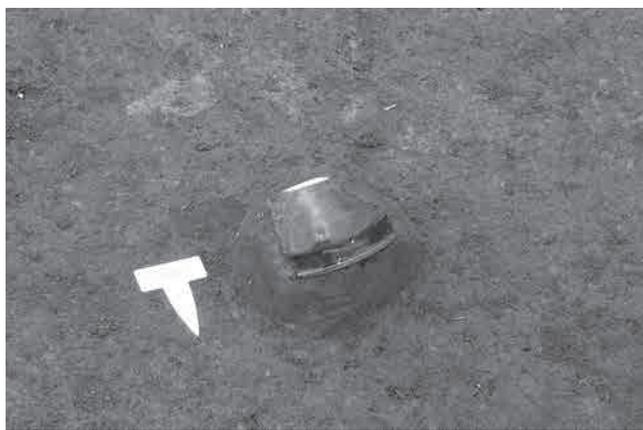


写真7 G区 SK1361 土坑天目茶碗出土状況



写真8 G区 SK1319 土坑瓦出土状況

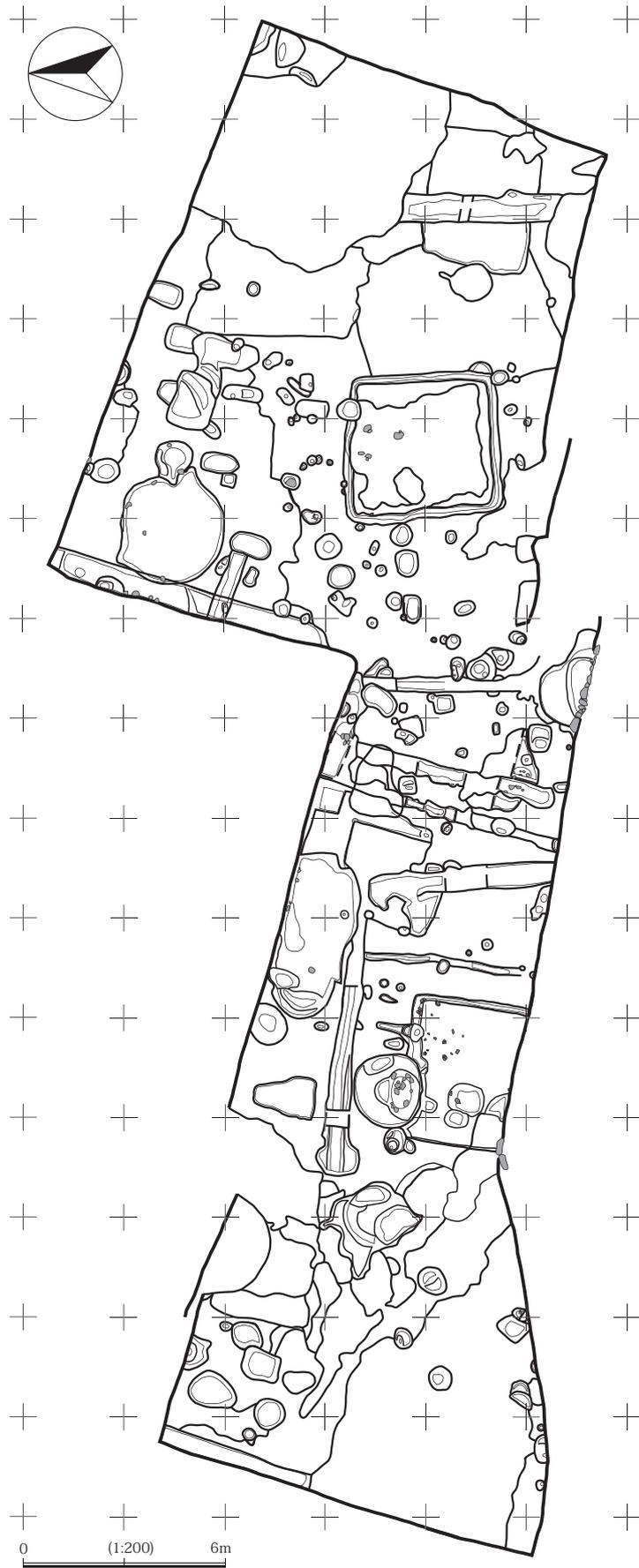


图2 G区遺構配置図